

常呂川の自然を見直し、地域の資源に

北見市 NPO 法人常呂川自然学校

北見市街を流れる小町川（常呂川水系）の河川敷。2015年10月31日、市内にまだ雪は積もっていないものの、肌寒い朝であった。ジャンパーにウェーター（胴付長靴）を身に付けた NPO 法人常呂川自然学校（以下、自然学校）のメンバーらが、川の中に入っていく――。

自然学校が、4月から12月の間、月1回の割合で7年間にわたって実施している市民魚類調査の現場である。この小町川は北見市街を流れる全長8kmほどの川で、常呂川水系無加川^{おかがわ}の支流にあたる。その下流、中流、上流の3カ所で、継続的に調査が行われている。

最初の調査ポイントであった小町川下流では、サケの死骸が見える範囲だけでも十数匹、川に浮いており、川底には小石が盛り上がった産卵床も見られた。このあたりまで遡上して産卵しているのは明らかである。メンバーは、まず川幅を測り、水温、水流の速さを測定する。その後、タモ網を使って15分間、魚を捕獲。魚の体長と体重を測定、川に戻す、といった流れで調査が行われる。

「一緒に魚を捕まえて下さい」

代表の羽根石晃彦（はねいし てるひこ）さんが、筆者にもタモ網を差し出してきた。「こうやって、タモを川底に入れて、その前方の水を足でかき回すのですよ。いわば、簡単な追い込み漁です。魚は驚いてタモに

向かって逃げ込んできますから、そこをすかさずすくい上げるのです」

そう説明され、調査員の一人に突然加えられた筆者も魚の捕獲を手伝い、なんとか数匹捕まえることができた。

当日の調査結果は、筆者を含め調査員5人で、ヤマメ33匹、アメマス4匹、トミヨ（トゲウオの仲間）4匹、ウグイ類2匹、フクドジョウ67匹、ドジョウ3匹の生息を確認した。



資源調査のため、タモ網を持って魚を捕獲しているメンバー

調査ポイントの3カ所のうち、上流ポイントにいたっては、川というより水路といった細い流れであったが、それでもヤマメ14匹を捕獲した。中流ポイントでは、水温を測定することで、サケの産卵に必要な湧水の存在も確認している。

「一見、何もいなそうな場所でも、調べることで見えてくるものがあるのです。地域資源調査は、とにかく調べるのが基本なの

です」

羽根石さんは、日差しに照らされた川面を見ながら強く語ってくれた。

■ 汚染が深刻だった常呂川

自然学校が調査をおこなっている小町川は、常呂川最大の支流である無加川に流れ込む細流である。大雨による氾濫でたびたび被害が出たため、1970年以降、新しく水路を造成して川の流れを変え、市街地を通っていた川を山側に移動させた経緯がある。

本流である常呂川は、オホーツク海に注ぐ一級河川で、全長120km。三国山を源として鹿ノ子ダムを通る本流と、大雪山を源とする無加川が北見市街で合流、さらに仁頃川などの支流を合わせて地域最大の河川となっている。しかし、かつてイトムカ水銀工場（現在は閉鎖）が上流にあったことや、家畜の糞尿、畑作からの土砂流出などが続いたため、川の汚染が深刻になり、生物にも多大な影響が出ていた。それに加えて地域住民の環境意識も低く、それがまた悪循環を生んでいたという。

こうした背景があるため、自然学校では小町川の資源調査を2008年（平成20年）から継続的に行い、データを蓄積してその資料を公表することで、環境保護を訴えている。

「小町川は年々、魚類などの生息環境がよくなり、未確認だった生物も見つかっています。いわば、地域の埋もれている自然財産の発掘調査で、そのための基礎データを作っているとも言えます。今後も調査を続け、市民が愛せる川だと分かってもらい

たいのです」

羽根石さんは、調査の目的をそう説明している。



小町川下流の調査ポイントで、川幅を測る常呂川自然学校のメンバー

■ 自然保護の重要性を痛感

羽根石さんは1963年（昭和38年）生まれ。工業高校を卒業したあと、会社に勤務して電気関係の技術者として17年間働いた。その傍ら、野鳥の会のメンバーや知床ボランティアレンジャーを務めるほか、美幌博物館の学芸協力員としても活動。環境教育や野生生物の調査業務に携わり、「網走川水系の淡水魚類相」、「美幌のハイケボタルの生態」、「トコロ幌内川の淡水魚相」などについての調査報告をまとめている。

——機械関係の技術者が、どうして自然環境に？

その問いかけに、20代半ばに「野鳥の会」に入会したのがきっかけだった、という。

機械いじりが好きだったため工業高校を選んだという羽根石さんは、若いときにはオーディオ機器に興味を持っていた。

「でも、次々にメーカーから新しい機器が

発売されて、それに踊らされているだけだと気づいたのです」

そんなころ、たまたま「野鳥の会」の活動を知って、電話をかけた。

「自分の名前が、羽根石だから、羽根のある鳥に関心を引かれたのかも」と笑う。

活動に参加すると面白かったし、それになによりも自然保護の必要性を痛感したという。こうして、羽根石さんは、積極的に「野鳥の会」の活動に加わるようになっていった。

■ 「子ども自然体験教室」を開始

羽根石さんは、活動を続けているうちに地元常呂川を取り巻く環境に注目する。

まずは、川を身近に、川と一体感をもてるように、常呂川で遊ぶ・学ぶ自然体験教室を行えば……。

若い世代が川を知ることが重要であろう。それが川を考える第一歩で、そこから自分たちが住む地域、住む町を考えていくようになっていくはず。

そう考えた羽根石さんは、1997年（平成9年）に自然学校を設立、その4年後の2001年からNPO法人にした。

地域の自然を利用して自然と共存、持続可能な社会を目指すために、環境教育や自然体験、環境調査を通して社会貢献することを目的にして、「行政や企業、市民活動団体と連携しながら街づくりに寄与する」といった方針を打ち出した。

2003年から、社会教育支援事業として「子ども自然体験教室」を開始。2008

年からは、小町川の魚類調査、同時に「野生ホタル調査」も実施している。そのほか、高校生を対象に環境科学授業を担当したり、ワークショップなどの活動も定期的に行ったりしている。社会人を対象にした自然ガイドやカヌー川下り講習会なども開いて、環境保護の重要性を広く訴えている。

最近では、2015年7月、中学校の授業を担当。おけと湖上流で、中学生22人が参加、地域にどのような魚がいるのか、自らが採ることで、どのような場所にどんな魚が生息しているのかを学んでもらう体験授業を行った。

7月下旬には、おけと湖畔で行われている「おけと湖水まつり」に出店。子供のための無料屋台村「水辺のレストラン」を開き、水生生物を子供たちに直接接触らせ生物の生態を教えた。

羽根石さんは、体験教室の参加者が年々減っていくことを危惧している。

「少子化や、子供が自然に対する興味を失っているのもありますが、一番の課題は母親の意識だと思います。母親の世代が、すでに自然の中で遊んだ経験が少ない世代のため、自分の子供も外に出しにくいのでは。また、こちら側にも課題があります。自然体験が子供の成長や人々の生活にどのように役立つかが、目に見える形で参加者に分からないからだと思います」

参加者減少の要因を、そう分析していた。

■ 大学生が資源調査に毎回参加

2015年11月現在、自然学校の会員は15人、理事は3人。そのほか、これまでに参加したボランティアスタッフは

100人以上を数えている。

スタッフの一人、長尾麻未（ながお まみ）さんは、環境土木を学んでいる北見工業大学の4年生。同大学ワングル部の部長も務めていた。2年生のとき、カヌー川下り講習で羽根石さんと知り合い、自然学校の活動を始めたという。小町川の魚類調査には毎回のように参加、積極的に手伝っている。

「もともと、外に出るのも好きだし、川も好きだし、少しでも役に立つのであれば」とボランティアに加わった。「活動は意義があると感じていますし、面白いです」と声を弾ませている。

また、同会の理事も務めている友田邦敏さん（48）は、「羽根石さんと一緒に野鳥の会に参加していた頃から、ずっと同じような自然環境を調査する活動を続けてきたので」と参加理由を語っている。



常呂川を自慢できるような川にしたい、と語る代表の羽根石さん

■ 自慢できる常呂川にしたい

小町川の流れの中を歩いているとき、羽根石さんは河岸を指差しながら語る。

「河岸を完全にコンクリートで固めては、

魚は棲めません。例えば、浚渫した土砂^{しゅんせつ}を河岸に残すことで、魚が住みやすい環境ができます。土砂があって草が生えれば、その下が陰になって、魚は鳥に狙われないし、エサ場も増えます」

河川をただコンクリートで覆ってしまうような護岸工事を行うだけでなく、資源として自然を残すことも大切だと強調していた。

川はゆっくりと流れ、水面に反射した光が輝いている。

「何とか、地域を流れる川をそこに住む人たちの資源や財産として捉え、常呂川を自慢できるよう、これから地域の人たちとどんなことがやれるのか、もっと考えていきたいですね」

羽根石さんは、熱く語っていた。

■ 連絡先

〒090-0061
北見市東陵町 183-50

NPO法人常呂川自然学校
理事長 羽根石 晃彦（はねいし てるひこ）

TEL 090-5955-6663
TEL/FAX 0157-26-0900
Email : hane1963@sea.plala.or.jp